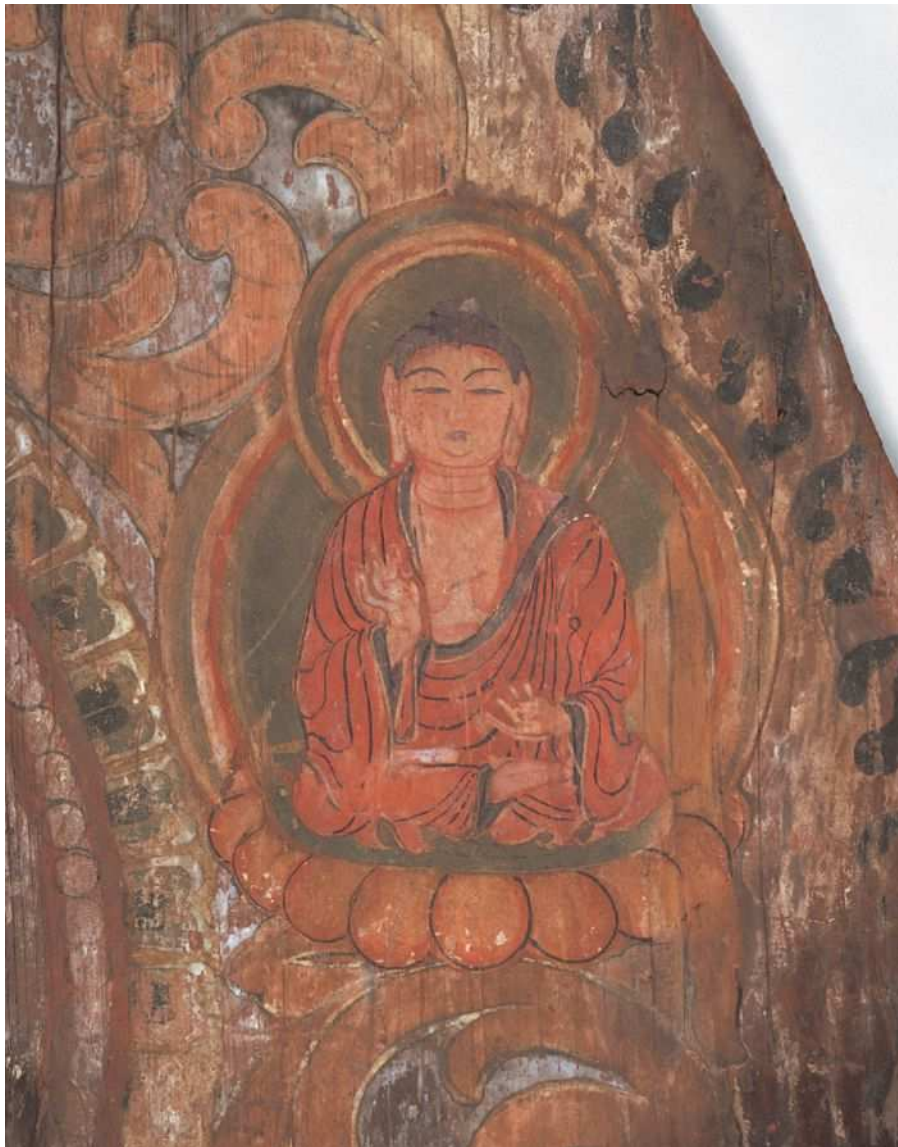


Nara National Museum

奈良国立博物館 だより

第**59**号

平成18年 10・11・12月



重要文化財 光背（部分 當麻寺）〈平常展「仏教美術の名品」より〉（「平常展のみどころ」参照）

特別展

第58回 正倉院展
10月24日（火）～11月12日（日）
東西新館

特別陳列

おん祭と
春日信仰の美術
12月9日（土）～平成19年1月21日（日）
東新館

平常展

仏教美術の名品
彫刻
中国古代青銅器
本館



七条刺納樹皮色袈裟



東大寺献物帳「国家珍宝帳」



鳥毛篆書屏風



金銀山水八卦背八角鏡



緑瑠璃十二曲長坏



馬鞍



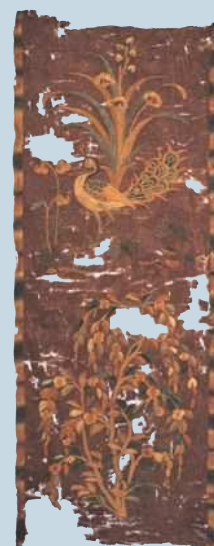
紅牙瑠璃尺



金光明最勝王經帙



黄銅合子



孔雀文刺繡幡

第58回 正倉院展

10月24日(火)～11月12日(日)(会期中無休)

午前9時～午後6時(金曜日は午後7時まで)

(入館は閉館30分前まで)

東西新館

聖武天皇の崩御から1250年の記念の年に当たる今年の正倉院展には、北倉13件、中倉26件、南倉26件、聖語藏3件、合わせて68件(うち初出陳13件)の宝物が出陳されます。

光明皇后による最初の東大寺大仏への宝物献納の目録である「国家珍宝帳」は、宝物の由緒を物語る第一級の史料であるとともに、すぐれた書法をみせる名品であり、16年ぶりの公開となります。このほか、「七条刺納樹皮色袈裟」や「長斑錦御軾(錦貼りのひじかけ)」、君主への訓戒の言葉を記した「鳥毛篆書屏風」など、聖武天皇ゆかりの品々が展示されます。

また、東大寺で用いられた「黄銅合子」、「黄銅柄香炉」、「金銅水瓶」などの仏具、法会を飾った「孔雀文刺繡幡」、「幡脚端飾」などからは、文化の華開いた天平時代の絢爛さが伝わってきます。

このほか、近年宮内庁正倉院事務所で行われた皮革調査の成果を踏まえ、多数の皮革製品が展示されるのも話題の一つです。

〈協力〉

読売新聞社、NHK奈良放送局、奈良テレビ放送

〈協賛〉

NTT西日本、近畿日本鉄道、JR東海、ダイキン工業、大和ハウスグループ、帝塚山学園・帝塚山大学、日本生命

特別陳列

おん祭と 春日信仰の 美術

12月9日(土)～1月21日(日)
東新館

奈良の歳末の風物詩となっている春日若宮おん祭は、保延2年(1136)9月17日にはじまったとされています。その後祭日は、室町時代から11月27日、明治11年(1878)からは現行の12月17日と日付が変わりましたが、その間絶えることなく続いたとされ、今年で871回目を数えます。

この展覧会では、おん祭の行われる時期に合わせ、祭の主役である若宮神やおん祭に関わる遺物を展示し、展示を通じておん祭の一端に触れていただきます。また春日信仰に関わる遺物を通じて、春日信仰の広がりと多様性を感じていただきます。

今も昔も盛儀を誇る南都の一大祭礼絵巻を、展示室でもじっくりとご堪能下さい。



①

②



④

- ① 神鹿(春日神鹿舎利厨子より)
(奈良国立博物館)
- ② 春日文殊曼荼羅
(奈良国立博物館)
- ③ 春日宮曼荼羅
(奈良・南市町自治会)
- ④ 舞楽面 納曾利(春日大社)



◎木造天蓋【金堂西の間所用】(法隆寺、飛鳥時代)

法隆寺金堂の内陣は三間に分かれており、それぞれに本尊がまつられ、各本尊の頭上には木製の天蓋が吊られている。今回展示する品は西の間天蓋で、金堂が建立された飛鳥時代の作と考えられている。伝存する天蓋としては、わが国最古の遺例である。形状はやや横長の長方形で、ヒノキの板4枚を枅形に組み、上部に屋根形の傾斜を作り、屋根に二重の葺き返しを付けている。側面にカーテンのようなひだを彫刻し、内外に彩絵を施している。側面にはかつて環珞をくわえていたと思われる鳳凰を飾り、葺き返しには天人や透彫金具を飾っている。この形式の天蓋は中国の隋時代や朝鮮半島・統一新羅時代に類例が見られ、海外からの影響を受けてこの天蓋が製作されたことがわかる。 内藤 栄(当館工芸考古室長)

平常展

仏教美術の名品

本館

彫刻

この場所で、多彩な仏像に出会う

本館の彫刻展示室は、本年8月よりリニューアルしました。

12月からは、さらに華麗に。

法隆寺金堂で仏像の頭上にかけてきた天蓋が、会場を飾ります。

※天蓋(法隆寺)は12月9日(土)より展示します。

※展示替作業のため本館第3室(「仏の荘厳」展示室)は、12月5日(火)～8日(金)の間、閉室いたします。



◎多聞天立像(金堂安置)(法隆寺、飛鳥時代)



右腕がもどった!

—東大寺・持国天像の修復—

大仏開眼1250年を記念して平成14年に奈良国立博物館で開催された特別展「東大寺のすべて」のための準備をおこなっていた平成13年の秋のこと。東大寺教学執事で東大寺図書館長を兼ねておられた狭川普文師から、破損した仏像の部材のたくさん入った唐櫃^{からびつ}が見つかったとのご連絡をいただき、鷺塚泰光館長(当時)のお供をして図書館へうかがった。なるほど多数のパーツがうずたかく重なっている。目をひいたものに、等身よりひとまわり大きい像の右腕がある。臂の少し上から手先までの部分で、鱗袖^{はなそで}と呼ばれる小さな袖と、広袖と呼ぶ長い袖、それに腕を防護するための籠手^{こて}を着けていて、武装形の天部像のものと考えられた。緑色に塗られた手のひらの中央には小さな柄孔^{ぼぞあな}がうがたれている。

狭川師からは、内山永久寺^{うちやまえいきゅうじ}から東大寺に伝来した持国天像の旧部材である可能性があるのではとご指摘を頂戴した。永久寺とはかつて天理市の石上神宮^{いそのかみじんぐう}に近接して存在し、明治初めの廃仏毀釈^{はいぶつ きしゃく}によって廃絶した大寺で、そこにあった数多くの宝物がいま各地に分散して保管されている。像高約2mの持国天像は、ほぼ同じ大きさの多聞天像とともに永久寺を離れ、東大寺二月堂に寄進されたもので、現在は東大寺から奈良国立博物館に寄託していただいている。大正元年(1912)に旧国宝に指定され、同4～5年(1915～16)に実施された保存修理の際に発見された納入品に記された墨書から、治承2年(1178)頃の造立である可能性が高いことがわかった作品である。甲冑^{かっちゅう}を身にまとい、眼を大きく見ひらいて仏敵をにらみする雄偉な像で、左手は腰脇で五本の指を握り、何か持物をとるかまをみせるが、右手は二の腕の半ばから先を失っている。

狭川師のご斡旋をいただき、発見された右腕を館に運び、持国天像にあてがってみることもなった。割れ口の全てがピッタリと合うわけではなく、一部の材が欠けていることが判明したが、どうも合う部分もありそうだ。なにより、左手と比較した大きさといい、金箔や彩色の色調といい、籠手の形式や貼りつけられた装飾文様のかたちといい、完全に同じといって過言でない。確信をもって館長に報告したのち、所蔵者である東大寺、また国指定文化財の保存管理に責任を有する文化庁美術学芸課等、関係機関に連絡をとった。狭川師のご慧眼に感服したことはいうまでもない。

発見された右腕が持国天像のものであることに疑いはなく、修復によって再び像に取りつけるのが望ましいことは誰の目にも明らかだったが、主として時間的な問題から、翌年春の展覧会までにその作業のすべてを終わらせることは困難だった。結果、展覧会では痛々しい添え木をした姿で展示せざるをえなかった(写真①)。それでも、腕の大半がない以前の姿(写真②)からみれば、まちがいなく安定感のある像容だ。かつて見いだされた納入品のうち、治承2年の年紀のあった木札には、持国天像を描いた墨画が描かれていて、それは左手は腰脇で剣を握り、右手は臂を曲げて手のひらを仰がせ、そこに宝珠^{ほうじゅ}をいただく形制である。これは『陀羅尼集經』^{だらにじききょう}に説かれる四天王像のうちの持国天の像容で、右腕の手のひら中央にうがたれた柄孔は、ここに宝珠を載せていたことを物語るものであった。

展覧会終了後、当館内に平成14年2月にオープンしたばかりの文化財保存修



写真① 〇持国天立像(仮取付時) 東大寺



写真② 〇持国天立像(修理前) 東大寺

理所内の財団法人美術院の工房において、文化庁美術学芸課の監督により、満を持して保存修理が施工された。その経過や新たな知見については、当館の地下回廊のパネル展示によってご紹介しているのでそちらをご覧くださいのだが、右腕の取り付けおよび彩色の剥落止めの作業のみにとどまらず、大正時の修理の際の頭部の組みつけ角度に問題のあることもわかり、これも現状のようにあらためられた(写真③)。平安後期の図像集である『図像抄』に描かれた陀羅尼集経様の持国天像(写真④)が、右手に戴いた宝珠の方へ視線をおくっていることを考慮するとき、この像がきわめて陀羅尼集経様に忠実な作例であったことに思いたる。その意味では、かねてより持国天像との作風のちがいが指摘されてきた多聞天像が、陀羅尼集経様の姿ではないことが再度重視されることもなろう。少なくとも、持国天像・多聞天像が当初から一具の二天王像として安置されていたのでないことだけは、両者がともに向かって左方に顔と視線を向けることから確かだろう。

おそらくは魔仏毀釈の騒動のなかで事故にあい、脱落してしまった右腕。年月を経てではあったが、再び本来の場所に戻ったことを、像とともに喜びたい。文化財の調査は保存完好なものだけを対象とすべきなのではない。破損を経た部材を詳しく調べるにより、その当初の様相を復元的に考察することは可能である。本年春の特別展「大勧進 重源」に展示が実現した、アメリカ・ハーバード大学サックラー美術館所蔵の木造仏手(元は伊賀・新大仏寺阿弥陀如来像の左手)や、やはり東大寺の山内から出現した、重源ゆかりの東大寺別所浄土堂の阿弥陀如来像の両手先との出会いを思うとき、持国天像右腕との邂逅は、これらの発見の端緒をつくってくれたような気がしてならない。

修理が完了し、往時の尊容を回復したこの持国天像は、本年8月1日からの本館リニューアルオープンに合わせ、展示を再開した。東入口から入ってすぐ正面に、多聞天像とともに仁王立ちしている光景が目飛びこんでくることと思う。露出展示であるので、四方から、その迫力ある姿を存分にご堪能いただきたい。

岩田 茂樹(当館美術室長)



写真③ ◎持国天立像(修理後) 東大寺



写真④ 「図像抄」所収「陀羅尼集経」様「東方天」(『大正新修大蔵経 図像三』より)

●展覧会日程●

	10 月	11 月	12 月
本 館	平常展 仏教美術の名品(彫刻)・(中国古代青銅器) (～12/27) (1/2～)		
東 新 館	正倉院展(10/24～11/12)		特別陳列 おん祭と春日信仰 (12/9～12/27) (1/2～1/21)
西 新 館			



鼎 当館(坂本コレクション)



○不動明王坐像 正寿院



○伎楽面(力士) 東大寺



○十一面観音立像 当館



○阿閼如来坐像 西大寺

平常展

仏教美術の名品

本館第1・13室

彫刻

10月3日〜

第1室

【大和の仏たち】●木造多聞天立像(法隆寺)、
●木造十二面観音立像(新薬師寺)、●木造虚空
藏菩薩坐像(北僧坊)、●木造伝明星菩薩立像
(弘仁寺)、●脱活乾漆・木造梵天立像、●脱活
乾漆・木造伝救脱菩薩立像(以上、秋篠寺)、●
木造持国天立像、●木造多聞天立像、●木造西
大門勒額(以上、東大寺)、●脱活乾漆舍利弗立
像、●脱活乾漆目犍連立像、●脱活乾漆緊那羅
立像(以上、興福寺)、●木心乾漆伝義淵僧正坐
像(岡寺)、●木心乾漆阿閼如来坐像(西大寺)、
●木造紅玻璃阿弥陀坐像(當麻寺)、●木造伝
行賀坐像(興福寺)、●木造十一面観音立像(勝
林寺)、●木造十一面観音立像(地福寺)、●木
心乾漆文殊菩薩坐像(薬師寺)、●木造菩薩立
像(金竜寺)、●木造八幡三神像(薬師寺)

第2室

【注目の逸品】●木造兜跋毘沙門天立像(当館)
【興福寺伝来の四天王像】●木造增長天立像(当
館)、●木造広目天立像(興福寺)、●木造多聞
天立像(当館)
【観音菩薩】●木造十一面観音立像(薬師寺)、
●木造千手観音立像(岡城寺)、●木造千手観音
立像(妙法院)、●木造十一面観音立像(元興寺)
【迎請の阿弥陀仏】●木造阿弥陀如来立像(浄
土寺)

第3室(12月5日〜8日 閉室)

【仏の荘厳】●木心乾漆光背・聖林寺、●銅造
光背(二月堂本尊所用)(東大寺)、●木造光背
(五面)(當麻寺)、●木造仏坐像(光背仏化)、
●木造飛天(以上、興福寺)、●阿弥陀如来像台座
(金堂西の間所用)(法隆寺)、●木造馬頭観音
立像(浄瑠璃寺)(12月3日まで)、●木造大蓋(金
堂西の間所用)(法隆寺)(12月9日から)

第4室

【ガンダーラの彫刻】石造菩薩立像、石造仏伝
図浮彫(以上、当館)
【中国石窟寺院の仏像】石造如来頭部(雲岡)、
石造菩薩頭部(龍泉寺)、石造菩薩頭部(響堂山)、
石造螺髻像頭部(響堂山)(以上、個人)
【中国・朝鮮半島の金銅仏】銅造二仏並坐像(当
館)、銅造誕生釈迦仏立像、銅造押出五尊仏(銅

【注目の逸品】

兜跋毘沙門天立像

当館

木造・彩色
重要文化財
平安時代(十一世紀)



地天女のひろげた両掌の上に立ち、外套風の金鎖甲をまとい、腕には海老籠手をつけ、鳥形をあらわした宝冠をかぶる。この特異な姿の毘沙門天像は、中国・西域地方にあった兜跋国(あるいはキジルの安西城)が外敵に襲われた際、その鎮護のために城門上に出現したという伝説に基づく。京都・東寺には唐から将来された兜跋毘沙門天像が伝来しており、かつて平安京の羅城門に安置されていたという。この像の模様が京都・清涼寺や鞍馬寺、滋賀・善水寺ほかのこざれているが、本像はなかでも原像に忠実な像容である。エキゾチックな姿はわが国の彫刻史上、異彩を放っている。瞳の部分に別材をはめこむ技法も東寺像を踏襲しているが、本像の場合、残念ながら後補の手がくわり、視線の向きが少し変更されている。

岩田茂樹(当館美術室長)

平常展

中国古代青銅器 坂本コレクション

本館第14・15室

爵・尊・鼎など中国古代の商(殷)〜漢代に製作された青銅器の逸品を展示しています。

パネル展示

修復文化財

【絵画】重要文化財 絹本着色四十九化仏阿弥陀来迎図(京都・光明寺)
【彫刻】重要文化財 木造持国天像(丙山永久寺伝来) 奈良・東大寺
【工芸】国宝 毛抜形太刀(若宮御料古神宝のうち)(奈良・春日大社)

パネル展示

国宝 十一面観音像(当館蔵の光学的調査

地下回廊

●Ⅱ国宝 ●Ⅱ重要文化財

以上すべての展示において、出陳作品を一部変更する場合があります。

展示評

奈良国立博物館見学記

土井 通弘
(就実大学人文科学部教授)

今年八月五日、大阪教育大学で博物館学を履修する学生諸君と奈良国立博物館を訪れたときの見学記を記すことにしよう。今度同道した学生諸君の多くは、近い将来教職につくことを希望する人たちであり、近年の博物館におけるさまざまな取り組みを知ってもらうことを目論んだ訪問であった。

まずはじめに、奈良国立博物館には提携大学制度があつて、詳しい内容は知らないが、常設展示は無料になっている。近年博物館の入館料が高騰していく中(特に特別展の場合で、このような制度が設置されていることは学生たちにとっては極めて有益な制度であらう。入館料徴収に任命した学生がこの制度を知っており、奈良博の受付の方に問うたところ、非常に親切に対応してくださったことは印象に強く残っている。中には、"大教大も捨てたもんじやないよ"という、照れくさいのか、冗談を飛ばす学生もいたが、博物館側の積極的な取り組みにも気づいてほしい。そこで私は学生諸君に思わず、君たち学生はさまざまな優遇措置を受けることができるんだから、博物館をもっと利用すべきだろう"と、少々皮肉をこめて言った。というのも、最近学生が博物館を利用することが少なくなっているからである。この現象はすべて学生側だけに原因があるわけではないが...

さて、私たちが訪れたとき、親子のギャラリー「探検! 仏さまの文様」展が開催されていた。今年で十二回を数えるこの展覧会は、毎年子供たちの夏休みに向けて開催されているもので、様々なテーマを設けて楽しく構成されている。

今回は仏教美術の重要なファクターである文様

に焦点をあて、葡萄唐草文・宝相華唐草文・山岳文様などが紹介されているのだが、通常の展示ではなかなか見にくいところを、ハイビジョン映像やデジタルカメラによる超拡大映像を併用して観覧者の視線が文様に収斂していくような展示の工夫がなされている。表現された文様を微にいり細にいり観察したあとで、観覧者は改めて仏教美術の世界性に気づくことになる。インドを出発した仏教美術が、わが国に到達するまでの一千年の長い旅路の中で地域々々で展開していた文様を吸収して発展してきたこと、そしてその文様を表現するための「素材と技術」の在りようまで気づかせてくれる。ともすれば小難しい教義の説明に陥りがちな仏教美術解説に対して、「美の造形」の魅力に引き込まれるのである。これは単に作品の細部を見やすくするためだけでなく、光学機器による調査の重要性を増している現在の研究環境の紹介にもなっており、まだ見ぬ将来の研究者の育成にも充分効果が期待できよう。

これでもかこれでもかというほどに、大量の優品を見せられることが多い昨今の展覧会に反して、二十件の展示であるが、造形の広がりやその歴史性を紹介した本展は、子供向けとは言いながら、私たち大人も十二分に楽しめる質の高い展示構成になつており、心地よい緊張感をもたらしにくれた。そしてなによりも、実際にはこれだけの展示をするには、通常より多くのご苦労があつたと思うのだが、本展示を楽しんでいる学芸の方々の息遣いが感じられる展覧会であつた。



親子のギャラリー「探検! 仏さまの文様」会場

●公開講座●

●第58回 正倉院展

- 10月28日(土)「聖武天皇に見る仏教政治思想」
森本公誠(華嚴宗管長・東大寺別当)
- 11月 4日(土)「正倉院と奈良朝絵画」
梶谷亮治(当館学芸課長)
- 11月11日(土)「宝物の献納について」
北 啓太(宮内庁正倉院事務所長)

●特別陳列 おん祭と春日信仰の美術

- 12月16日(土)「おん祭と雅楽」
笠置侃一(南都楽所楽頭)
- 1月13日(土)「春日信仰の美術」
清水 健(当館学芸課研究員)

※いずれも、午後1時30分～3時、当館講堂。聴講無料。
開場午後1時。1時より講堂入口で整理券を配布します。定員200名。

●正倉院展ボランティア解説●

- 10月24日(火)～11月12日(日)
「正倉院展の見どころ」 解説ボランティア
1H5回、30分程度。
午前10時～、11時～、12時～、午後1時30分～、2時30分～
当館講堂。土曜日の午後は公開講座のため中止。その他、催し等のために中止となる回もあります。

●奈良国立博物館賛助会員

2006年9月末現在、個人会員19名、団体会員9団体、特別賛助会員4団体の登録を頂いております。
新規会員となられた方のご芳名をあげさせていただきます。
【個人会員】 吉田 伸 様
【特別会員】 朝日新聞社様
*賛助会員に関するお問い合わせは、
奈良国立博物館 渉外課 賛助会員担当まで。

●サンデー・トーク●

- 10月15日(日) 「正倉院展なるほど講座」
清水 健(当館学芸課研究員)
- 11月19日(日) 「唐招提寺の盧舎那仏を運ぶ」
海老名和明(日本通運株式会社技術顧問)
- 12月10日(日) 「春日宮曼荼羅」
中島 博(当館情報サービス室長)

※いずれも、午後2時～3時、当館講堂。開場午後1時30分。聴講無料。

◆観覧料改定のお知らせ

奈良国立博物館では、2006年10月1日から平常展観覧料金を、一般500円(団体400円)、高校・大学生250円(団体200円)に改定いたしました。
なお、平常展観覧料金改定に伴い、次のような新しい割引及び無料観覧日を設けましたので、ご活用ください。

- ・「子どもといっしょ割引」(2006年10月1日から適用)
子ども(中学生以下)と一緒に平常展を観覧される方の観覧料を、一般400円、高大生200円とします。
- ・「レイト割引」(2006年12月1日から適用)
冬休み(12月・1月)及び夏休み(7月・8月)の期間で、開館時間延長時の17時以降に、平常展を観覧される方の観覧料を、一般400円、高大生200円とします。
- ・「こどもの日」、「敬老の日」及び「関西文化の日」のほか、新たに「節分の日」(2007年2月3日)及び「国際博物館の日」(2007年5月18日)を無料観覧日とします。

◆キャンパスメンバーズ

奈良国立博物館は、大学等と連携を図り、博物館が所蔵する文化財を核として文化や歴史を共に学ぶ場を提供する「キャンパスメンバーズ」の制度を設けております。
会員大学等の学生および引率教職員は平常展については無料、特別展については団体料金で観覧できます。(学生証及び引率教職員は身分証明書の提示をお願いいたします。)

なお、現在、加入いただいている大学は次のとおりです。

奈良教育大学 帝塚山大学(帝塚山高校含む) 奈良女子大学
京都嵯峨芸術大学 大阪教育大学 京都精華大学
京都橘大学 龍谷大学 京都大学 近畿大学文芸学部
奈良産業大学 奈良文化女子短期大学付属高等学校 奈良学園高等学校

*キャンパスメンバーズに関するお問い合わせは、
奈良国立博物館 渉外課 キャンパスメンバーズ担当まで

ふく 鍔

奈良国立博物館(坂本コレクション)
高22.3cm
中国・後漢時代(1~3世紀)
本館(第15室)展示中



中国古代青銅器といえ
ば、複雑怪奇な文様をつ
けた厳めしい鼎や壺を思
い描く人が多いと思う。また、
三千年以上の大昔に高
度な鑄造技術があったこ
とを知って驚く人もいるか
もしれない。当館の坂本コ
レクションは、まさにそんな
名品を取り揃えた青銅器
の殿堂であるが、ここでは
あえて一味違った質素な
銅釜を紹介しておきたい。

写真はユーラシア草原
地帯の遊牧民族が用いた釜で、オルドス鍔と呼ばれる(オルドス
とは、黄河が北に大きく湾曲する内側の一帯をさす)。深鉢形の
口縁に二つの把手、底には短い圈足が付く。装飾は表面に人
面の眉を思わせる弧線を鑄出すのみである。黒海沿岸からシベ
リア、内蒙古、中国東北部まで、その分布は広大であり、若干の
地域・時代差を含みながらも、遊牧民の生活様式に適ったシンプ
ルかつ実用的なスタイルが踏襲され続けている。匈奴や鮮卑と
いった草原の猛者たちが、これを馬の尻に括り付けて運ぶ姿を
想像するのも楽しい。実のところ、彼らが携えた青銅製の容器は
この釜だけなのである。逆に短剣やベルト金具など身の回り品
に趣向を凝らしている。中原の農耕・都市文明に発達したのが
文様コテコテの鼎や壺やらであったことを思えば、思想的にも
全く異質の人たちだったと納得されるであろう。

ちなみに、騎馬民族国家説で有名な江上波夫氏が、若かりし
頃(1930年代)に取り組んだのはこのオルドス青銅器の研究で
ある。壮大な学説の出発点は、意外にもこんな質素な釜への関
心からであった。派手な青銅器に食傷ぎみの貴兄、草原ドラマ
がお好きな浪漫派の諸氏には是非とも一見をお薦めしたい。

吉澤 悟(当館資料室長)

平常展の みどころ

こう 光 はい 背

當麻寺
高116.3cm 幅36.6cm
平安時代(10世紀)
重要文化財
本館(第3室)展示中

昭和32年から行われた當麻寺本堂(曼荼羅堂)解体修理の
際、内陣の化粧屋根裏に補強材として打ち付けられていた夥し
い数量の光背が発見され、研究者たちを瞠目させた。いずれも
平安時代の南都で盛んに製作されたいわゆる「板光背」で、ヒノ
キの平板に白下地を施して文様を彩画しており、金箔がまばゆ
い輝きを放つものもある。光背群の多くは10世紀に製作された
とみられ、ほぼ完形のもの40面、残欠15面、66の断片からなる。鮮
やかな賦彩で描かれた意匠は実に多様で、絵画資料としても非
常に貴重である。

本品は本館「仏の莊嚴」
コーナーに展示中の、6面
の一つである。坐像用の光
背の左半分が残ったもので、
大ぶりの四巴唐草文が列
ぶ中に、朱衣の坐仏が三
体配されている。素朴な筆
致だが、たっぷりとした肉身
には朱で隈取りが行われ、
かなり本格的な立体感の
表現がみられる。

仏像すなわち主を失った
光背だけが、なぜかくも大
量に當麻寺に伝来したのか。
謎というほかないが、仏像
本体とは別に製作された未
使用品が一括して保管さ
れていた可能性も指摘され
ており、平安時代の工房の
あり方をめぐって、様々な想
像がふくらむ。

稲本泰生(当館企画室長)



開館予定(10月~12月)

■開館時間

9時30分~17時(ただし11月10日までの
毎週金曜日と、12月17日(日)は19時まで)
正倉院展の会期中は、9時~18時(金曜日は
19時まで)
※いずれも入館は閉館の30分前まで

■休館日

月曜日(ただし正倉院の会期中は無休)
10月9日(体育の日)は開館し、10月10日(火)
は休館します。

観覧料金

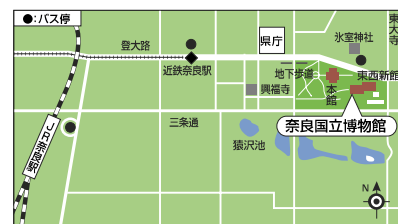
第58回 正倉院展

	大 人	高校・大学生	小・中学生
当 日	1,000円	700円	400円
前 売	900円	600円	300円
団 体	900円	600円	300円

平常展・特別陳列

	大 人	高校・大学生	中学生以下
一 般	500円	250円	無料
団 体	400円	200円	

団体は責任者が引率する20名以上



〔交通案内〕近鉄奈良駅下車徒歩15分、またはJR奈良
駅・近鉄奈良駅から奈良交通「市内循環」バス「氷室神
社・国立博物館」下車

※当館には駐車スペースがございませんので最寄りの県営駐車場等(有料)をご利用下さい。

 **奈良国立博物館**
Nara National Museum

〒630-8213 奈良市登大路町50(奈良公園内) TEL. 0742-22-7771 FAX. 0742-22-7221 テレホン・サービス 0742-22-3331 ホームページ(URL) <http://www.narahaku.go.jp/>

『奈良国立博物館だより』は、1・4・7・10月に発行します。郵送をご
希望の方は、何月号かを明記し、返信用封筒(90円切手貼付、宛名明
記)を同封して、当館の情報サービス室にお申し込みください。